子どもたちに核のない社会を！

7月14日、「被爆67周年原水禁世界大会」の前段行動として、和歌山県平和フォーラムによる非核・平和行進がおこなわれ、約300人が参加、解放同盟からは和歌山市ブロックを中心に参加した。

和歌山市役所前でおこなわれた出発式で、平和フォーラムの裏野勝也代表は「脱原発と再生可能エネルギーへの転換を求めていこう」とあいさつした。

その後「核も戦争もない平和な21世紀に」をスローガンに「原発の再稼動反対」とシュプレヒコールをあげながら、市役所前を出発し、JR和歌山駅へとすすみ、さらに、県立体育館、中之島交差点、本町四丁目の交差点、市駅前へとデモ行進をおこなった。

横断幕には「核と人類は共存できない」と文字が書かれており、「子どもたちに核のない社会」をつくるため核兵器廃絶と脱原発を訴えた。

再生可能エネルギーへの転換を！

主張

部落差別の実態を直視し、要求の組織化と行政闘争を強化しよう

今年は、2002年3月「地対財特法」失効から10年を迎える。私たち部落解放同盟は、法律失効前から和歌山県行政にたいして法期限後の対策を要求し「差別がある限り同和行政が必要」との基本姿勢を確認し、今日に至っている。

しかし、部落差別の実態や、生活、就労、教育など多くの課題が残されている。県行政は「人権課題現況調査」（実態調査）をとりまとめ、それぞれの行政課題を明らかにしたが、そのとりくみは「一般行政に工夫」して施策を講じるとしながら、財政のひっ迫を理由に施策が遅々として進んでいないのが現実である。

第57回定期大会でも提起されているとおり「実態調査」を各部落、各支部で徹底的に分析し、今日の差別実態を明らかにする運動を展開しなければならない。そして私たちは、日常活動として「相談活動」「世話役活動」を基本に、非常に厳しい生活を余儀なくされている部落大衆の「声」を私たちの組織で受け止め、運動に転化し具体的実践に移さなければならない。

また、あとを絶たない差別事件、とくに戸籍謄本・抄本、住民票の不正取得事件が発覚している。今回、明らかになったプライム社は仲介者を通じて全国各地の探偵社や調査会社から依頼を受け、職務上請求書を大量に偽造（2万枚）して不正取得を繰り返し、その数は1万件をこえていた。背景には、いまだに結婚や就職のときに身元調査をおこない、出身地や国籍などで相手を判断する差別意識や悪しき社会的慣習が存在しており、その根は深い。

今回和歌山県下で、20件の戸籍謄本や住民票が不正取得されていたことが明らかになった。これらの不正取得事件にたいして和歌山県行政や、市町村行政にとりくみの強化と「本人通知」制度の導入を要請してきた結果、1市3町（橋本市・湯浅町・広川町・有田川町）で事前登録型の本人通知制度が導入されたが、26市町村が未実施であり、「本人通知制度」の導入を今年の市町村交渉で求めていかなければならない。

各支部は、要求を掘り起こし、差別の実態を浮き彫りにし、市町村行政に部落問題解決の実態調査と施策を講じさせなければならない。そしてそれぞれの要求を結集し、市町村交渉を積み上げ、県行政との交渉を強力に展開しよう。

人と人とのつながりを大切に

伊都地方人権尊重連絡協議会 こころの研修

7月11日、午後2時より、橋本市産業文化会館で、伊都地方人権尊重連絡協議会主催による「人と人がつながるために」と題したシンポジウムが開催された。

和歌山県在住の女性3人のパネラーと、コーディネーターの和歌山県立博物館副館長の府中恵理さんが、質問や問題提起をしながら、それぞれの体験談や活動についてのシンポジウムがすすめられた。

愛知医科大学看護学部非常勤講師の岩崎順子さんは、数年前に夫を癌で亡くした。3人の子どもと失意のどん底に落とされたが「生と死を語る会」に参加し、そのときの体験談を話したところ、冊子にまとめてみてはとすすめられ実現させた。その後「ガンが病気じゃなくなったとき」などの著書も出版している。

岡山理科大学非常勤講師の松上京子さんは、20代のときにバイク事故で下半身不随になり車椅子生活となった。両親や周りの人たちに励まされ、アメリカ留学、帰国後結婚し2児の母となり、その後障がい者カヌーを始め、選手として大きな大会にも出場、現在は人権や福祉をテーマに大学で講師をおこなっている。

痣と共に生きる会・フクロウバー代表の長谷川志穂さんは、生まれつき顔の右半分に痣があり、中学時代に同級生からいじめを受け不登校になった。一時期暴走族に入ったが、痣のことは全く気にせずに自分を受け入れてくれた仲間たちに出会い感動した。現在、社会福祉法人「麦の郷」で、クリーニングの仕事をする傍ら、「痣と共に生きる会」の代表として、人の見た目にとらわれることなく、誰もが自分らしく生きられる社会をめざし活動している。

この3人に共通していることは、過去に他人には想像もつかないような辛い経験をしている。自暴自棄になり何度も自殺を考えるような日々から「人との出会い」をきっかけにそれを乗りこえ立ち上がってきた。出会った人は、夫であり子どもであり、仲間や尊敬すべき人たちだ。その人たちの「言葉」は一生の宝物であり、自分らしく生きていくための糧になっている。昨今の不登校やひきこもりの子どもたち、見た目で偏見や差別を受ける人たちを、それぞれの活動を通じて「人間は楽しい！」「生きることはすばらしい！」と実感できるような「心から心へ伝えるメッセージ」を送りつづけたい。それが私たちの社会への恩返しである。という思いが強く伝わるシンポジウムであった。

体験や活動を語る3人のパネラー

各支部大会ひらく

岩橋支部の定期大会が7月10日岩橋文化会館でひらかれた。新役員は次のとおり

支部長　吉本　拓司
副支部長　北川　善文
書記長　福島　隆志

芦原支部の定期大会が7月24日芦原文化会館ひらかれた。新役員は次のとおり

支部長　岡本　峯雄
副支部長　増田　昭賢
書記長　山本　敏明

文化の窓

凍（こお）りの掌（て）

著者の実父の聞き取りをもとに3年かけ執筆に至った。それは、戦争で犠牲になったシベリア抑留が実際に体験した氷点下の地獄だった。敗戦後19歳だった父と多くの若者たちの人生が「強制抑留」により一変した。連れて行かれた先では一生重労働を課せられ生きて帰れないと言われた極寒シベリア。疲労と飢えで毎日仲間が、凍りつく地に埋められた。66年前の生きた記憶を次代に伝える一冊（漫画）である。

小池書院　著者　おざわゆき

ISBN978-4-86225-831-1